「団地内地蔵」の敷地内の配置と京都市における分布および変遷について

公的賃貸住宅団地の共用空間と習俗に関する考察 その1

CONFIGURATION, DISTRIBUTION AND TRANSFORMATION OF
DANCHI-NAI-JIZO IN KYOTO CITY

A study on manners and common space of public housing Part1

政木 哲也^{*1}, 長坂 大^{*2}

Tetsuya MASAKI and Dai NAGASAKA

Within the limits of public housing in Kyoto city, *Jizo* (stone statue of Buddhist god) are often found in common spaces. Our survey of every *Danchi-nai-Jizo* (*Jizo* inside public housing) in the city clarified the existing situation and its spatial configuration. Geographical distribution shows how *Danchi-nai-Jizo* spread citywide, and its chronological distribution linked to the development era illustrates how it continued to exist despite transformations of the way buildings are laid out. The spatial configuration shows centrality among different scales of community space. We were able to see how *Danchi-nai-Jizo* representing more flexible and accommodating nature in modern urban planning.

Keywords : *Danchi, Public housing, Spatial structure, Jizo, Common use space, Kyoto-city*

団地, 公的賃貸住宅, 空間構成, 地蔵, 共用空間, 京都市

1. はじめに

1.1. 研究の目的と背景

わが国の都市部は、戦後復興期や高度経済成長期など急激な人口流入により生じた住宅不足に対処するため、大規模な団地や造成地の計画・開発により拡張してきた。人々はこの新たな都市空間に住み、新しい共同体を組織したが、そこには機能的な共用空間こそあれ、旧来の伝統的な習俗のための空間は計画されていなかった。公的な賃貸住宅団地においても、用途や機能が明確な共同施設にはそのような空間はなかった。

ところが、京都市内の多くの公的賃貸住宅団地では、敷地内に地蔵がある。さらに、8月後半には地蔵盆と呼ばれる祭礼行事が敷地の中で行われている。元々信仰や祭礼のために計画された空間ではないことは明らかである。では、こうした団地空間の中に持ち込まれた伝統的な習俗によって変容した近代的な共用空間とはどのようなものだろうか。これを考察することが本研究の目的である。

京都を中心として近畿地方では、古くから都市空間の中に地蔵を祀る^{注1)} ことによって共同体の精神的な帰属意識を維持している。それは今も毎年旧暦7月24日に行われる地蔵盆という行事に顕著である。本研究では、この地蔵信仰とそれに関わる営みを人々の習俗とみなし、団地の共用空間との関係に着目する。

本研究は前・後編の二部から成り立っている。これは団地空間の中に持ち込まれた習俗が、地蔵祠という常設的な施設と、地蔵盆行

事の仮設的な祭礼空間との二つの側面から考察することができるからである。本稿は前編に該当し、常設的な「団地内地蔵」の京都市内における分布の状況と敷地内の配置を明らかにするとともに、団地の共用空間における「団地内地蔵」の配置の類型化による分析を通して団地が潜在的に備えている許容性または融通性について検証する。後編では、団地の共用空間で行われる祭礼行事の調査と分析を通して、地蔵と共同体の関係性について検証する予定である。

1.2. 用語の定義

本稿で取り扱う「公的賃貸住宅団地」とは、京都市営住宅、京都府営住宅、独立行政法人都市再生機構（旧日本住宅公団）が保有する賃貸住宅（以下公団住宅）の3つとする。本稿では以上の3つの公的賃貸住宅団地を「団地」と記す^{注2)}。市営住宅と府営住宅はそれぞれ京都市市営住宅条例と京都府府営住宅条例によって位置づけられているが、このうち市営住宅は、公営住宅法に基づく公営住宅と、住宅地区改良法に基づく改良住宅とに区別される^{注3)}。市内には京都市住宅供給公社および京都府住宅供給公社それぞれが保有する「公社住宅」と呼ばれる賃貸住宅があるが、市営住宅・府営住宅等と比べ団地数及び住戸数が極めて少ないため、便宜上除外した^{注4)}。

「共用空間」とは、団地の敷地内に計画された広場・緑地・児童遊園・通路・駐車場・およびこれらに付属する空地を指す^{注5)}。

「団地内地蔵」とは、団地内に設置されている地蔵祠のうち、共用空間にあるものを指す。住戸内や住戸バルコニー等入居者の専有部

^{*1} 京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科 助教・修士(工学)

^{*2} 京都工芸繊維大学デザイン・建築学系 教授・博士(工学)

Assist. Prof., Dept. of Urban Environmental Design, Kyoto Tachibana University, M.Eng.

Prof., Faculty of Design and Architecture, Kyoto Institute of Technology, Dr.Eng.

分にある地藏祠も確認されたが、その実態についての把握が困難であることと、団地内の共用空間との関わりが希薄なため、本稿では対象から除外した。ひとつの地藏祠の中に複数の地藏が祀られている事例は、「団地内地蔵」に限らず広く見られる。「団地内地蔵」においても様々な祀られ方が確認されたので、本稿では地藏の数ではなく祠の数（棟数）をもって「団地内地蔵」の単位とする。

1.3. 既往研究との関係

本研究に関連する既往研究では、まず集合住宅^{注6)}の共用空間における入居者の利用状況を取り扱ったものが挙げられる。この分野における成果は多大である³⁾が、中でも本研究に重要な視点をもたらすものとして、集合住宅における近隣空間の領域を閾・核概念を用いて分析したもの⁴⁾と、集合住宅を計画・供給する側に立脚して公団住宅のプレイロット等の外部空間構成の年代の変遷を扱った研究⁵⁾が挙げられる。

地藏に関連する建築学の既往研究では、まず都市空間における地藏配置に言及した竹内らの研究⁶⁾が挙げられる。これは京都の都心部の地藏を都市空間の構成要素と捉え、コミュニティの単位を示すものとして地藏祠を位置づけている。この研究が対象としたのは京都市の中心を南北に通る烏丸通と堀川通に挟まれた都心部の区域に分布する地藏祠である。地藏の配置と街路との関係を分析することによって、地藏を祀り管理する共同体の単位空間を明らかにし、この単位空間の重なりによって京都の都市空間が構成されていることを示した。本稿ではこの考え方を、京都市の公営賃貸住宅団地に応用・展開し、団地の共用空間を分析するものである。

また近年では、都市コミュニティとの関連において地藏盆を位置づけた研究⁷⁾のように、地藏が地域に果たす役割が見直されている^{注7)}。これらの研究では京都市都心部の伝統的地区にある地藏を、古来の「町」というコミュニティの単位との関係の中で言及している。

一方で、京都の郊外における地藏に着目した研究では、山科区での地藏盆⁹⁾や、左京区下鴨での事例¹⁰⁾があるが、これらは限定的な地域における地藏の状況を捉えるにとどまっている。

集合住宅の中にある地藏は、集合住宅内のコミュニティの状況を知る上で有効な研究テーマであると思われるが、建築計画の分野においてはほとんど取り扱われていない^{注8)}。地藏盆をはじめとする地藏信仰については、これまで民俗学や宗教学の分野において多くの研究がなされてきた。その中でも、集合住宅内に地藏が設置された事例を取り扱った報告や¹¹⁾、近年の地藏信仰の多様性に関する記述として市内の寺院が郊外住宅地や団地等への地藏附与や貸し地藏について取り上げた研究^{12) 13)}および壬生寺による報告¹⁴⁾が本研究と関連する。特に壬生寺の貸し地藏に関する論考では、主に都心部で行われていた地藏盆が郊外へと伝播した様子を示している。このようにこの分野では、郊外の住宅地や団地における地藏信仰について言及しているが、かたや建築学においては研究課題が残されていると言えよう。

そこで本研究は、集合住宅の外部空間構成を分析した研究と、街路における地藏の配置に言及した都市空間論的な研究の成果をふまえた上で、団地の共用空間の特質を、地藏による共同体の習俗を通して明らかにするものである。これは近代以降の計画的都市空間における限界と可能性についての考察であり、対比的な地藏という対象を切り口としている点に、研究の独自性があると考えられる。

1.4. 研究の方法と構成

本稿における「団地内地蔵」の主要な調査は、京都市内の団地のうち旧京北町の3団地を除く全148団地^{注9)}を対象にした著者による臨地調査である。2014年8月から10月の間に伏見区東部および山科区、2015年10月から翌2016年1月の間にそれ以外の区域の団地を踏査した。「団地内地蔵」のあった団地における調査事項は、①団地内の祠の棟数、②祠の位置、③祠の向きとし、「団地内地蔵」の状況を明らかにした。

臨地調査に先立ち、行政資料および地図を用いて京都市内のすべての団地について調べ、調査対象団地の一覧を作成した。市営住宅の所在地、建設年、管理住戸数等のデータは、関連条例や行政資料¹⁵⁾を用いた。府営住宅に関しては、関連条例および管理業務を委託された京都府住宅供給公社の公式ホームページ^{注10)}を、公団住宅に関しては、都市再生機構が公開している資料¹⁶⁾を用いて整理した。各団地の敷地境界と住棟配置を表した配置図作成には、京都市の住宅地図^{注11)}をベースマップに用いた。

また、団地の管理運営に関しては入居者に配布される「しおり」の記載内容を参照^{注12)}するとともに、市営住宅に関しては市職員へのヒアリング調査^{注13)}を実施し情報を得た。

「団地内地蔵」の分析の前に、第2章において調査対象の全148団地を住棟配置によって類型化し、それぞれの地理的分布と建設年代の分布の特徴についてまとめる。これにより京都市内の団地建設の変遷を浮かび上がらせ、「団地内地蔵」がある共用空間の状況を整理する。

第3章では、「団地内地蔵」の京都市における地理的分布と、「団地内地蔵」のある団地の建設時期の年代的分布を分析し、団地の計画の流れとの関係について考察する。

第4章では、臨地調査で得られた結果から、「団地内地蔵」の敷地内の配置に類型を見出し、「団地内地蔵」の配置が示す共用空間の特質について考察する。

2. 京都市の公営賃貸住宅団地の住棟配置

2.1. 住棟配置と団地規模の関係

本章では調査対象である京都市内の全148団地の住棟配置・規模とその地理的・年代的分布の特徴について整理する。

京都市における団地建設は、戦後の応急住宅施策期^{注14)}より始まり、それ以降も継続され、その規模や立地を含めた団地計画には、建設された時代ごとの社会情勢が色濃く反映されている。それが団地の住棟配置において顕著であると考えられるため、これを6つの類型(平行 parallel、囲み surrounded、線状 lineal、点在 disperse、単独 independent、その他 etc.)に分けた^{注15)}。

まず、全団地を管理住戸数ごとに分け、住棟配置別に団地数を集計した表(Table1)によって、住棟配置における団地規模の傾向を示した。

表によると、全148団地のおよそ4割の60団地が「平行 parallel」の住棟配置であり、団地規模の大小に関わらずこの住棟配置が見られた。特に1000戸を超える8つの団地はすべて「平行 parallel」である。団地数が次に多いのが、一敷地に一棟のみが建つ「単独 independent」と中庭を囲むように住棟が配置される「囲み surrounded」である。「単独 independent」は団地あたり一棟のみの

ため住戸数が少ないが、「囲み surrounded」も 30 団地のうち 8 割以上が 200 住戸未満の小規模団地であることがわかった。

京都市では上記の 3 種類の住棟配置が全団地数の 8 割以上を占め、規模の大きい団地ほど「平行 parallel」の割合が高い傾向がある。

Table1 Amount of stocks in each *Danchi* according to building lay-out

		amount of stocks in each Danchi											total
		0 - 99	100 - 199	200 - 299	300 - 399	400 - 499	500 - 599	600 - 699	700 - 799	800 - 899	900 - 999	1000 -	
building lay-out	parallel	6	12	8	9	2	7	3	2	3	0	8	60
	surrounded	16	9	2	1	0	1	0	0	0	1	0	30
	lineal	7	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	10
	disperse	3	0	2	1	0	1	1	0	0	1	0	9
	independent	25	5	2	2	0	0	0	0	0	0	0	34
	etc.	2	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5
total		59	30	14	13	2	9	4	3	4	2	8	148

2.2. 全団地の地理的分布と住棟配置

前節で確認した特徴をふまえながら、以下では全 148 団地の地理的分布について確認する。全団地の所在地を行政区ごとに分け、住棟配置別に団地数を集計したのが下表 (Table2) である。

Table2 Amount of stocks in each district according to building lay-out

		amount of <i>Danchi</i> in each administrative district											total
		Kita	Sakyo	Nakagyo	Higashiyama	Kamigyo	Shimogyo	Minami	Ukyo	Yamashina	Nishigyo	Fushimi	
building lay-out	parallel	1	2	1	0	0	0	4	6	6	10	30	60
	surrounded	0	1	1	0	0	0	1	4	7	2	14	30
	lineal	0	2	0	0	0	0	3	2	0	0	3	10
	disperse	1	4	0	1	0	1	2	0	0	0	0	9
	independent	1	1	5	0	3	4	9	3	1	2	5	34
	etc.	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	5
total		3	10	7	1	3	5	19	15	15	16	54	148

この表からは、京都市の全ての行政区に少なくとも 1 つ以上の団地が立地している状況がわかる。京都市は、地理的に都心部とその周辺に広がる郊外地域とに分けることが可能だが、京都市の市営住宅に関する行政資料¹⁵⁾では、山科区、西京区、伏見区を「郊外」と位置付けており、本稿においてもこの 3 区を郊外として扱う。また、同資料では、郊外に多くの市営住宅ストックが集積していることが示されているが、Table2 でも全 148 団地のうち 85 団地が郊外に属し、同じ傾向が見られた。特に伏見区における集中が顕著である。

住棟配置別に見ると、郊外に「平行 parallel」の団地が集積していることがわかる。団地数の多い伏見区では、半数以上の 30 団地が「平行 parallel」であり、西京区の 10 団地がそれに続く。伏見区と西京区にはそれぞれ団地を複数抱える広大なニュータウン(向島ニュータウンと洛西ニュータウン)が所在し、ニュータウンを構成する団地のほとんどが「平行 parallel」の住棟配置であることもその一因である。また「囲み surrounded」が伏見区と山科区の両区に合わせ 21 団地が分布しており、他地域に比べて極めて多い。

南区には 19 の団地が分布しているが、そのうち 9 団地が比較的規模の小さい「単独 independent」である。住棟配置ごとの規模の特

徴を考慮すると、京都市では郊外に特に規模の大きい団地が集中していることが言える。

2.3. 全団地の年代的分布と住棟配置

最後に、全団地の年代的分布を表すため、建設時期を 5 年ごとに区切り、住棟配置別に団地数を集計した (Table3)。

Table3 Chronological spread of *Danchi* according to building lay-out

		1950-1954	1955-1959	1960-1964	1965-1969	1970-1974	1975-1979	1980-1984	1985-1989	1990-1994	1995-1999	2000-2004	2005-2009	2010-2014	total
No. of <i>Danchi</i>		1	6	13	20	17	24	14	19	14	9	8	1	2	148
ave. of apartments		5.0	16.5	6.6	4.7	11.2	11.1	7.9	3.5	3.2	4.1	3.1	2.0	2.5	
building lay-out	parallel	1	4	4	8	8	16	8	3	3	3	2	0	0	60
	surrounded	0	0	1	3	0	3	2	9	4	5	3	0	0	30
	lineal	0	0	0	3	0	1	0	3	2	0	0	0	1	10
	disperse	0	2	3	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	9
	independent	0	0	5	6	7	3	1	3	5	1	3	0	0	34
	etc.	0	0	0	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0	5

全団地の建設年代ごとの団地数 (No. of *Danchi*) の変遷を辿ると、1970 年代後半に建設されたものが 24 団地と最も多く^{注16)}、この 5 年間を中心に建設された団地数が年代的に多く分布していることがわかる。また、この時期の団地あたりの平均住棟数 (ave. of apartments) はおよそ 11 棟であり、京都市における団地の大量建設期^{注17)}にあたる。しかし 1980 年代後半以降は、平均住棟数が減少していく状況が示されている。さらに、高度経済成長期から 1980 年代の前半まで「平行 parallel」が最も多い時期が続いたが、1980 年代後半から「囲み surrounded」の小規模な団地の建設への移行が確認でき、平均住棟数の減少と連動していることがわかる。

老朽化が進んだ古い工法の簡易耐火や木造住宅の建て替えが始まったのが 1980 年代後半である。元の敷地が広大な市営 N 団地 (右京区) のような団地は「平行配置」となったが、市営 O 住宅 (山科区) のように周辺の市街化が進んだ小規模な団地では、中庭を持つ「囲み配置」をとるようになった。2 つのニュータウンに建設された多くの団地は「平行配置」であったが、1980 年代後半に新たに建設された小規模な団地では「囲み配置」が増え始め、「平行配置」よりも多くなった。

ここまで京都市の団地建設の変遷^{注18)}を見てきたが、1960 年代後半から 1970 年代までの大規模団地の大量建設と、それ以降の小規模化が大きな流れとしてあった。またこれと同様に、「平行 parallel」から「囲み surrounded」への住棟配置の移行が確認できた。

3. 「団地内地蔵」の分布とその変遷

3.1. 「団地内地蔵」の地理的分布

この章では調査対象の団地において、「団地内地蔵」がどのように分布しているのかを、団地の立地から読み取れる地理的傾向と、団地の建設年代から読み取れる年代的傾向から分析する。

著者による臨地調査の結果、調査対象となった市内の 148 団地のうち、「団地内地蔵」が確認されたのは 55 団地である。これらの団地の所在地を、行政区別に集計したのが Table4 であり、地図上にプロットしたのが Fig. 1 である。

これらの図表により「団地内地蔵」のある団地の地理的分布には以下の特徴が確認できた；

- ・ 上京区を除くすべての区に「団地内地蔵」が確認された
- ・ 都心部と比べ郊外に「団地内地蔵」のある団地が多い^{注19)}

・ 特定の地域に「団地内地蔵」のある団地が集中的に分布している
郊外の団地と比べると都心部では「団地内地蔵」のある団地が少ない。都心部の密集した街区に立地する「単独 independent」の団地は、建設時には周辺の街路にすでに地蔵が多く存在し、改めて団地内にある理由がなかったと推測される。都心部で「団地内地蔵」があるのは改良住宅に偏っていることも特徴的である。

Table4 Amount of Danchi with Danchi-nai-Jizo according to district

	Kita	Sakyo	Nakagyo	Higashiyama	Kamigyo	Shimogyo	Minami	Ukyo	Yamashina	Nishigyo	Fushimi	total
amount of Danchi w/ danchi-nai-jizo	2	6	3	1	0	1	4	7	11	3	17	55
(total amount of Danchi)	(3)	(10)	(7)	(1)	(3)	(5)	(19)	(15)	(15)	(16)	(54)	(148)

Fig.1 Geographical distribution of Danchi-nai-Jizo in Kyoto city

京都市の郊外の大規模な団地の多くが、丘陵や水田等を開発して建設されたため、その土地由来の地蔵が団地に定着したとは考えにくく、外から団地内に持ち込まれたと考えるのが自然である。さらに、京都市内には7団地が建設された向島ニュータウンと、12団地が建設された洛西ニュータウンの二つの大規模なニュータウンがあるが、「団地内地蔵」が確認されたのは洛西ニュータウンの2団地に限られ、向島ニュータウンでは確認されなかった。ニュータウンでは「団地内地蔵」が他の郊外の団地ほど根付かなかったと言える。

臨地調査によって「団地内地蔵」は市内に広く分布していることが明らかになったが、一方で「団地内地蔵」が集中して見られた特定の地域がいくつかあった。とりわけ顕著なのが山科区である。山科区は15団地が立地する郊外地域であるが、そのうち11団地において「団地内地蔵」が確認され、市内でも際立って「団地内地蔵」の多い地域と言える。同様に伏見区の北西部の竹田学区(Takeda School District)と深草学区(Fukakusa School District)をあわせ

た地域と、伏見区東部の石田地域(Ishida Area)において「団地内地蔵」が集中していることが明らかになった。

3.2. 「団地内地蔵」の年代的分布

以下では全ての調査対象団地の建設年代と管理住戸数、「団地内地蔵」の有無の関係を示した上で、「団地内地蔵」のある団地の年代的分布について検証する。次のグラフ(Fig.2)は全団地の建設時期と管理住戸数との関係を示したものである。

このグラフにより、1960年代から70年代前半に大量に供給された団地では、その規模の大小に関わらず「団地内地蔵」が確認されたが、とりわけ大規模なものの多くに「団地内地蔵」があることが明らかになった(Fig.2 X)。

1980年前後に「団地内地蔵」のない団地が集中しているのは、「団地内地蔵」のある団地が2つしかない洛西ニュータウンと「団地内地蔵」のない向島ニュータウンが建設ラッシュを迎え、その分が反映されたからだと考えられる。

一方で、1980年代以降に建設された多くの団地は、平均住棟数が少なく住戸数も300戸未満の小規模な団地であった。しかし、この時期に建設された団地にも「団地内地蔵」が多く見られた(Fig.2 Y)。

このことから、1980年前後に建設された団地に「団地内地蔵」のないものが集中するという特徴があるものの、全体を俯瞰すると「団地内地蔵」は団地規模の年代的な変遷に関わらず存在し続けた経緯が明らかになった。

Fig.2 Chronological spread of Danchi-nai-Jizo

3.3. 団地種別の「団地内地蔵」の分布傾向

「団地内地蔵」が確認された団地について市営住宅・府営住宅・公団住宅の別で見ると、市営住宅が86団地中44団地、府営住宅が23団地中8団地、公団住宅が39団地中3団地となり、市営住宅は半数の団地で「団地内地蔵」が確認された一方で、公団住宅は「団地内地蔵」が少ないことがわかった。中でも市営住宅の改良住宅では21団地中14団地において確認され、極めて多いことが示された。

本稿では、市営(公営住宅・改良住宅)・府営・公団の団地を公的

賃貸住宅団地としてひとくくりに扱っているが、実際には入居条件や管理方法等運用面における違いによって「団地内地蔵」の有無が影響していると捉えることも可能である。特に共用空間における日常的な管理は、団地種別間で運用が異なるため、以下に整理した。

市営住宅の「団地内地蔵」のうち、公営住宅内にあるものはすべて入居者または近隣住民が自主的に持ち込んだ^{注20)}ものであり、行政および管理者は地蔵の設置および使用について関与はしない。しかし、住棟改修等に影響するため一部の地蔵祠の状況に関しては把握しているという^{注21)}。一方、改良住宅内の「団地内地蔵」は、住宅地区改良事業の際に元々の居住地区にあったものを移設したものとされる^{注22)}ため、団地の建替や入居者世代の移り変わりの中で「団地内地蔵」が継承されやすいと推測される^{注23)}。

市営住宅（公営住宅）と府営住宅において、共用空間に地蔵を祀ることは、公営住宅法に定められている団地の使用目的に該当しない。そのため、原則的に「団地内地蔵」は行政により撤去されるはずだが、実際は「団地内地蔵」は撤去されずに多く残されている状況である。このような共用空間の「緩和的」な運用を支えているのは、入居者による共同体の日常的な保管義務^{注24)}にあると考えられる。具体的には、団地自治会による共用空間の清掃や、それにかかる共益費の管理・徴収等である。主体的に共用空間を維持管理している状況が成立しているため、入居者共同体にとって「団地内地蔵」の設置・維持が容易だと想定される。

府営住宅の「団地内地蔵」における状況は市営住宅（公営住宅）と近い。ただ入居者に配布される「入居のしおり」には、「団地の庭について」の項があり、個人の占有的使用は認めない旨が明記されている。市営住宅の「住まいのしおり」にはこのような記載は無いため、府営住宅の共用空間の方が、運用上制約が多いと言える。

一方で、公団住宅の共用空間の維持保全は都市再生機構（旧日本住宅公団）が行い、共益費の管理・徴収も、機構が行っている^{注25)}。この点で入居者による共用空間への関与の仕方が市営住宅および府営住宅と制度的に異なる。公団住宅の共用空間は入居者にとって、管理サービスを受ける対象であるため、自治的な「団地内地蔵」の設置等に対して市営住宅等と比べ大きく制限されると考えられる。

4. 「団地内地蔵」の敷地内の配置

本章では「団地内地蔵」の敷地内の位置と向きをもって、住棟配置および共用空間との関係を分析し、「団地内地蔵」が配置されている空間の特質を明らかにする。

4.1. 「団地内地蔵」の配置類型

「団地内地蔵」は住棟近傍、広場状空地の中または端、そして団地の敷地境界等、敷地内の様々な場所で確認された。地蔵を祀り管理する共同体が構成する単位空間は、地蔵祠の配置によって示されることを扱ったのが竹内らの研究⁶⁾である。この研究では地蔵の配置を、街路空間の「表通り」と「裏通り（路地）」とに大きく区分した上で、「町」境界との関係および路地内の位置をもとに、共同体の中心性を示す「中心型」、町相互の境界を示す「境界型」、他の2つほど明確に特徴を示さない「不特定型」の3つの類型によって分類している。

「団地内地蔵」の配置は、都心部の地蔵祠と異なる点がいくつかある。まず都心部の「町」とは異なり、団地の境界は塀や生け垣によって可視化されている^{注26)}ため、街路に面する「団地内地蔵」には不可視な町相互の境界を示す「境界型」のような特性はない。さらに、都心部の地蔵祠と最も異なるのは、児童遊園等の広場状空地のように、街路との関係が希薄な位置にある場合である。この広場状空地にある事例こそが「団地内地蔵」の独特な点である。

一方「表通り」としての街路に対して、団地の住棟まわりの通路を「裏通り（路地）」とみなせば、都心部の地蔵祠のように街路空間との共通性を見出すことが可能である。

以上をふまえて「団地内地蔵」それぞれが属する空間を3つのスケール（住棟・団地・近隣）に分け、その配置を類型化した（Fig. 3）。

・「住棟共用型 Apartment type」

住棟近傍にある「団地内地蔵」のうち、住棟入居者の方を向いているような配置を「住棟共用型」とする。これは例えば、住棟入口への通路に接しているものや、住棟の前面空地にありその住棟を向いているものである。「住棟共用型」では基本的に「団地内地蔵」が各住棟に配置されるので、ひとつの団地に複数見られる。

Fig.3 Distribution patterns of Danchi-nai-Jizo

・「団地共用型 Danchi type」

団地内の広場状空地の中または端にあり、広く開けた方を向くような「団地内地蔵」の配置を「団地共用型」とする。「団地共用型」は、周囲または前面が開放されている場所に「団地内地蔵」があるため、視認性が高い。

・「近隣共用型 Neighborhood type」

団地の境界上にあり、街路側を向いている「団地内地蔵」を「近隣共用型」とする。団地の入居者よりも近隣の住民に対して開いた配置である。

「団地内地蔵」の配置は、基本的に以上の3類型に分類できるが、ひとつの団地の中に複数の「団地内地蔵」があり、それぞれ異なる配置類型を示す事例があった。これを本稿では異なる配置類型の「複合型 Complex type」として位置付け、次節で分析を行う。

4.2. 住棟配置および共用空間との関係

ここでは先にあげた「団地内地蔵」の配置類型を、2章で扱った住棟配置を元に、団地の共用空間との関係について検証する。次表 (Table5) は6種類の住棟配置ごとに「団地内地蔵」の配置類型 (distribution patterns) と調査によって得られた祠の位置 (installation positions) および祠の向き (Jizo orientations) のデータを集計したものである^{注27)}。

Table5 Cross-tab of *Danchi-nai-Jizo* distribution patterns and installation attributes with *Danchi* building lay-outs

		distribution patterns				installation positions										total
		Apartment	Danchi	Neighborhood	Complex	between square	parking	piloti	between+square	between+parking	between+piloti	fringe				
building lay-outs	parallel	9	14	0	2	13	6	2	0	2	0	0	2	25		
	surrounded	1	10	2	0	4	5	0	1	0	0	0	3	13		
	lineal	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3		
	disperse	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2		
	independent	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
	etc.	3	3	1	4	4	1	1	0	0	1	2	2	11		
Jizo orientations	apartment	13	1	0	0	9	0	0	1	0	0	1	3	14		
	path	0	12	0	0	7	1	0	1	0	0	0	3	12		
	square	0	14	0	0	1	12	0	0	0	0	0	1	14		
	apartment+path	1	0	0	4	3	0	0	0	0	1	1	0	5		
	apartment+square	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	2		
	parking	0	4	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	4		
	outward	0	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	3	4		
total		14	31	4	6	21	13	4	2	2	1	2	10	55		

Table5 では「団地内地蔵」のある55団地のうち、最も多いおよそ6割 (31団地) が「団地共用型」に分類され、次いで「住棟共用型」が多い (14団地) ことがわかった。「団地共用型」が「平行 parallel」と「囲み surrounded」の2種類の住棟配置に多いのに対し、「住棟共用型」は「平行 parallel」の住棟配置に集中するという特徴が見られた。「近隣共用型」は全体で4団地しか確認できず、住棟配置との強い相関は見られなかった。

「住棟共用型」の「団地内地蔵」は、住棟の廊下と階段室の入口にいたる細い屋外通路に面した場所等、住棟を出入りする入居者から見やすい位置にあることが多い。住棟配置が「平行 parallel」の場合、住棟間はやや閉鎖的な路地状の共用空間となる。この空間にあ

る「団地内地蔵」は、住棟入居者にとって存在感のある祠の位置 (「狭間 between」) や祠の向き (「住棟 apartment」) となる。

伏見区の市営Ih住宅は、住棟配置が「平行 parallel」の片廊下型住棟が並ぶ団地だが、敷地の中央を太い構内通路が通り、そこから左右に伸びるように細い通路が住棟間に敷かれている。この団地の「団地内地蔵」の4つのうち3つは細い通路の突当りから正面を向いており、残りの1つは住棟と細い通路の間にある。

中京区の市営Mh団地も住棟配置が「平行 parallel」の団地だが、各住棟にひとつずつ「団地内地蔵」が見られ、その全てが通路を挟んで住棟の方を向くような配置となっている。

これらの「住棟共用型」の事例は、団地全体の大きな共用空間の中に、住棟ごとの共同体による小さな単位空間が併存するという構成を示している。これは竹内らが提示した裏通り (路地) の地藏祠による「中心型」空間構成との類似が指摘できる。住棟入居者が「団地内地蔵」によって団地の共用空間の中に伝統的な路地的空間を見出したと考えられる。

「団地共用型」の特徴は、「団地内地蔵」が団地にとって中心的な広場またはそれに準じる空地にあり、大きく開いた「広場状空地 square」または「通路 path」の方に向いていることである。一般的に地藏祠の前面は、祈願をしたり祭礼をしたりするための空地がとられるが、「団地共用型」の場合それが顕著である。「駐車場 parking」の「団地内地蔵」もこの「団地共用型」を示す。

Table5からは住棟配置の「囲み surrounded」の全13団地のうち10団地が「団地共用型」を示すことから、この住棟配置との強い関連が見られた。住棟配置が「平行 parallel」の団地のうちの14団地も「団地共用型」であるが、この場合の「団地内地蔵」は特定の住棟との近接は見られず、むしろ集会所の近傍や広場状空地に多く見られた。

山科区の市営N団地は5棟の住棟が「囲み surrounded」の配置をとる団地である。住棟に囲まれた中庭状の広場とその周りの通路に面して集会所の入口が設けられており、この通路と集会所の「狭間 between」に「団地内地蔵」があり、通路とその先の広場状空地側に向いている。

右京区の市営D団地は、住棟の集まる街区と細い街路を挟み集会所と児童遊園のある区画からなる。「団地内地蔵」は「広場状空地 square」である児童遊園の隅にあり、広場状空地側を向いている。

このように「団地共用型」は、団地全体の入居者から視認性が高く、アクセスしやすい集会所近傍や児童遊園等に「団地内地蔵」があることで、団地全体の共同体を象徴するような配置類型であると考えることができる。

「近隣共用型」の「団地内地蔵」はすべて「団地境界上 fringe」にあり、「団地外 outward」を向くため、住棟配置や共用空間との結びつきは希薄である。

伏見区の府営S団地には、「近隣共用型」の「団地内地蔵」が2つある。この団地は街区の中に埋まるように立地し、公共の空間に接するのは、団地出入口のある北側の街路と南側の街路である。南側の「団地内地蔵」は、敷地境界の塀を一部切り欠いて配置されており、北側は出入口の脇に街路を向いて配置されている。

山科区の市営M団地の「団地内地蔵」は、高い塀に囲まれた児童遊園の外側にある。これは街路の隅切り部分にあたり、近隣住民か

ら視認性の高い配置となっている。この「団地内地蔵」の設置や管理について団地入居者はほとんど関わっていない^{注28)}ことから、「近隣共用型」は、必ずしも団地の共同体と結び付いているわけではなく、近隣のために団地の共用空間を融通している様相が示唆された。

「複合型」とは、ひとつの団地の中の複数の「団地内地蔵」が、それぞれ異なる配置類型を示した6つの団地の事例を指す。

例えば、左京区の市営Y団地は、現在は高層棟3棟と中層8棟からなる改良住宅であるが、各住棟の近傍に「団地内地蔵」が確認された (Fig. 4)。ただ、比較的新しい住棟の傍には街路に面している「団地内地蔵」もあり、「住棟共用型」と「近隣共用型」の両方が混在している状況と言える。このように複数の街区から構成される改良住宅は、住棟が段階的に建て替えられることで共用空間も更新され、それに伴い「団地内地蔵」の配置も変遷する様子が見られた。

Fig.4 Locations and orientations of *Danchi-nai-Jizo* in Municipal housing Y (Sakyo-ward)

これまで各配置類型の特徴について見てきたが、住棟配置との関係で着目すべき点は、共に多くの「団地内地蔵」が確認された2種類の住棟配置「平行 parallel」と「囲み surrounded」のうち、「住棟共用型」が「平行 parallel」では9団地なのに対し、「囲み surrounded」では1団地でしか見られないことである。2章で明らかにした「平行 parallel」から「囲み surrounded」への住棟配置の年代的推移と、3.2.で明らかにした「団地内地蔵」のある団地の小規模化傾向をふまえると、「住棟共用型」の特徴であった住棟単位の小さな共用空間が成立しにくくなり、団地全体による「団地共用型」への移行があったと考えられる。

4.3. 共用空間の許容性

ここでは臨地調査の際に得た「団地内地蔵」の位置 (installation positions) と向き (Jizo orientations) の分析を通して、団地の共用空間における余剰空間の存在とその特質について考察する。

「団地内地蔵」がある55団地のうち、祠の位置の分類として最も多いのが「狭間 between」の21団地 (他の位置との組合せを含めると26団地) であった。この「狭間」とは、(住棟や集会所の) 建物と通路の間や、通路と通路の間のように、機能・用途が定まっている要素の狭間である余剰空間を指す。「狭間 between」の「団地内地蔵」は、住棟または通路を向く傾向があり、住棟入居者の日常的な動線上にある身近な存在として位置付けられる。

これは「住棟共用型」の典型的な特徴を示しており、住棟入居者の共同体が住棟ごとにそれぞれ余剰空間を見出した結果である。

「団地境界上 fringe」も団地の中の余剰空間の一種と位置付けられるが、祠の向きによって大きく性質が異なる。「団地内地蔵」が団地の内側の住棟を向く場合は「住棟共用型」を示し、通路や広場を向く場合は「団地共用型」を示す。団地の外側を向く場合は近隣住民の共同体に開かれた「近隣共用型」を示す。

「広場状空地 square」に「団地内地蔵」がある13団地のうち、その多くは広場側を向く (12団地)。これは「広場状空地 square」が団地の中の余剰空間と位置付けられつつ、団地における「広場状空地」の空間的な優位性が「団地内地蔵」の象徴性を高めるために利用されていると解釈できる。「駐車場 parking」の「団地内地蔵」も同様である。これは共用空間の用途が明確であるにも関わらず、「団地内地蔵」のために共用空間本来の機能を損なわない範囲において余剰空間が見出された状況を示している。これは「団地共用型」に見られる特徴である。

これまで見てきたように、団地の共用空間に潜在する余剰空間こそが「団地内地蔵」を許容してきたと言える。また、「団地内地蔵」の配置を通して、住棟ごとの小さな単位空間から団地全体の大きな単位空間まで、さらに団地入居者に限らず近隣住民の共同体まで、融通的に許容される共用空間の特質が確認できた。こうして団地の共用空間には異質なものを受け入れることのできる許容性や融通性が備わっていたことが「団地内地蔵」を通して明らかにされた。

5. まとめ

本研究で得られた成果をまとめる。まず、臨地調査によって、これまで実態が知られていなかった京都市内の「団地内地蔵」の分布を示した。京都市の広い範囲で「団地内地蔵」が存在するが、京都市では郊外により多くの団地が建設された経緯があり、「団地内地蔵」も郊外に多く分布するという傾向が確認された。

また、高度経済成長期に大量に建設された大規模団地において多くの「団地内地蔵」が確認できたが、1980年代後半以降に小規模化した団地においても「団地内地蔵」が存在し続けたことが明らかになった。団地種別の違いでは、市営住宅や府営住宅に「団地内地蔵」が多く見られ、公団住宅では少ない傾向が確認できた。これは共用空間における日常的な維持管理体制の影響があると考えられた。

団地の共用空間における「団地内地蔵」の配置に関して、以下の特徴が明らかになった。

- ① 「団地内地蔵」が属する共用空間のスケールに応じて、「住棟共用型」「団地共用型」「近隣共用型」の3つの配置類型と、これらの組合せである「複合型」とによって分類できる。
- ② 「住棟共用型」は、団地全体の共用空間内に併存する、住棟入居者の共同体による小さな単位空間を示す。
- ③ 「団地共用型」は、視認性の高い広場状空地等であり、団地全体による共同体の象徴的空間を示す。
- ④ 「近隣共用型」は、街路に開くことで団地の共用空間を近隣住民による共同体に融通する。
- ⑤ 団地の小規模化およびそれに伴う住棟配置の変遷に伴い、「住棟共用型」から「団地共用型」へ移行する傾向がある。

「団地内地蔵」の位置や向きを詳細に見ると、共用空間の中にある

余剰的な空間が顕在化する。この余剰的空間は、「団地内地蔵」のように元来計画されていない要素を許容する性質を持つ。本稿では、団地の共用空間には住棟配置や団地の規模が変わっても、「団地内地蔵」を受け入れる許容性があり、様々な共同体の単位空間に対応する融通性が見られることを明らかにした。

次稿では、夏の地蔵盆における共用空間の運用を通して「団地内地蔵」を取り巻く団地空間がどのように変容するのかを考察し、本稿では言及できなかった「団地内地蔵」と共同体との関わり方について取り上げる予定である。

謝辞

調査には団地入居者の方々と京都市の関係者にご協力頂いた。また、本研究の一部は（公財）日本文化藝術財団による「平成 26 年度日本文化藝術奨学金」および（公財）大学コンソーシアム京都「2014 年度未来の京都創造研究事業」の支援により実施された。ここに記して謝意を表する。

注

- 注 1) 京都の路傍に石仏を祀るようになったのは中世にまで遡ることができるが、地蔵として祀られるようになったのは江戸時代初期であったとされる。参考文献 1) 2)
- 注 2) 調査対象には 1 棟のみの公的賃貸住宅がいくつかあったがこれらも含め「団地」とする。
- 注 3) 公営住宅は、住宅に困窮する低所得者に対して低廉な家賃で賃貸し、または転貸することにより、国民生活の安定と社会福祉の増進に寄与することを目的として建設する住宅。改良住宅は、住宅地区改良法に基づき、不良住宅が密集する地区の住環境改善等に伴い、住宅に困窮する従前居住者向けに供給する公的な賃貸住宅。
- 注 4) 公社住宅と同様に、京都市住宅供給公社と京都府住宅供給公社が管理し、行政が家賃補助をおこなう特定優良賃貸住宅も本稿では取り扱わない。なぜなら、特定優良賃貸住宅とは民間資本によって整備された集合住宅に対して京都市住宅供給公社および京都府住宅供給公社が一定期間建物の維持管理や入居者を募集するものであり、公的な賃貸住宅として整備されていないからである。
- 注 5) 公営住宅法第二条九項に定められた共同施設のうち、公営住宅等整備基準に挙げられているものに加え、団地の駐車場も共有空間に含めた。ピロティまたは軒下の半屋外空間もこれに含める。
- 注 6) 本章において取り上げた「集合住宅」の既往研究は、所有や管理元の公的/民間や、一敷地に単棟/複数棟の区別に関わらず、ビルディングタイプとしての「集合住宅」を広く捉えるものである。本稿の「公的賃貸住宅団地」も「集合住宅」に含まれるとする。
- 注 7) この活動は京都市の地域活性化事業として継続的に行われ、多くの成果を挙げている。参考文献 8) に詳しくまとめられている。
- 注 8) ただし、先に挙げた参考文献 4) では、領域形成における核として機能するものの一つとして地蔵祠を挙げているが、詳しい言及はない。
- 注 9) 団地種別ごとの管理戸数は、2015 年 9 月の時点で、市営住宅 86 団地 22,918 戸、府営住宅 23 団地 5,089 戸、公団住宅 39 団地 14,454 戸である。参考文献 15) 16) および 注 10) を参照した。
- 注 10) 京都府住宅供給公社 <http://kyoto-juko.jp/html/fuei/list2.html>
- 注 11) 使用した住宅地図（「ゼンリン」発行）は、京都市中京区（2012 年）、下京区（2012 年）、東山区（2012 年）、北区（2013 年）、南区（2012 年）、左京区（2012 年）、右京区 1 中心部（2012 年）、伏見区（2012 年）、山科区（2012 年）、西京区（2012 年）である。
- 注 12) 市営住宅に関しては「住まいのしおり（平成 25 年 7 月発行）」、府営住宅に関しては「入居のしおり（平成 29 年 8 月発行）」、公団住宅に関しては UR ホームページ上の「住まいのしおり（<http://www.ur-net.go.jp/sumainoshiori/>）」を参照。
- 注 13) 京都市役所すまいまちづくり課において 2014 年 12 月 10 日実施
- 注 14) 終戦直後からの 10 年間を指す。京都市は、戦災をほとんど受けなかったことから戦後の市内転入者が極めて多く、さらに非戦災都市と位置付

けられたことが、他の戦災都市と比べ復興を著しく遅らせた要因となった。元来住宅の老朽化が進んでいたことも、住宅事情を悪化させる背景としてあった。京都市がはじめて市営住宅の建設に着手したのは、1947 年度に入ってからであった。

- 注 15) 参考文献 5) で用いられている住棟配置類型のうち該当するものを引用した。「その他 etc.」には他の住棟配置の特徴が複合したものが含まれる。
- 注 16) 1976 年度から開始される京都市の第 3 期住宅建設 5 箇年計画は、住宅の量的不足が一旦解消された時代背景を反映し、住宅の「量より質の重視」が目標となった。ところが市の計画戸数が第 2 期計画（71～75 年度）と同程度が見込まれたのは、遅れていた洛西と向島ニュータウンの建設が 1975 年から開始されたことによる。これによって京都市は建設戸数のピークを 1980 年度に迎え、これは全国的趨勢からは 5～10 年ほど遅れていた。
- 注 17) 1971 年度からの 10 年間を指す。1971 年度からの第 2 期住宅建設 5 箇年計画では、これまでの民間による狭小な住宅供給による住宅難を解消すべく、「1 人 1 室」を確保できることを目標に、市営住宅で 6000 戸整備する方針とした。この時期の大量建設を支えたのは、元々が水田等の排水上問題のある土地をまとめて取得した上で開発された大規模な市営住宅があった。市営住宅に限らず 1000 戸を超える団地が最も多く建設されたのもこの時期である。
- 注 18) 1990 年代以降の流れについてまとめた。1990 年代前半のバブル景気による地価高騰は都心部における家族居住を困難にさせ、京都市の人口は戦後初めて減少に転じた。このような人口動向を反映し、公団住宅はこの時期 1 棟しか建設されず、市営住宅も 4～5 棟程度の小規模な「囲み配置」の団地が多くなった。一方、伏見区東部の醍醐地区では、元々あった大規模な市営住宅の老朽化を受け、1989 年から 2000 年までの間に計約 1200 戸の団地群が建設された。これらの団地も多くが「囲み配置」をとり、他の地域での新しい団地も「囲み配置」が多数を占めるようになった。東京都の公団住宅の外部空間構成に関する研究である参考文献 5) では、建設年代による住棟配置の変化を明らかにしており（p. 527）、1980 年代より「平行」と「囲み（45 度）」の住棟配置を持つ団地がほぼ同数で推移し、2000 年代に「囲み（45 度）」が上回っている。これは京都市の団地の動向と符合する。2000 年以降に建設された団地は、少子化と高齢化社会の到来を反映し、その多くが老朽化した既存の団地の建て替えて占められた。
- 注 19) 全団地のうち郊外に分布するものは 85 団地／全 148 団地（57.4%）であり、郊外の「団地内地蔵」のある団地は 31 団地／全 55 団地（56.4%）となり、極めて近い割合を示すため。
- 注 20) 4 章で言及する「近隣共用型」の「団地内地蔵」では、入居者の関与が少なく、もっぱら近隣住民による管理・運用されている状況が臨地調査時に確認された。かつての入居者が持ち込んだ地蔵が、近隣住民によって引き継がれている可能性も考えられるが、詳細は不明なため本文では近隣住民の持ち込みも想定できる記述とした。
- 注 21) 市担当職員へのヒアリングによる。注 13) を参照。
- 注 22) 改良住宅内の「団地内地蔵」の中には、改良事業の後に入居者によって持ち込まれた地蔵が含まれる可能性が考えられる。しかし本稿では、これらの別について言及することは論旨に合わない判断した。詳細は稿を改めて論じたい。
- 注 23) 例えば東山区の改良住宅 S 団地のように、新旧の住棟が混在している団地では、建て替えられた新しい住棟のピロティ部分に「団地内地蔵」のための場所が用意されていることがある。
- 注 24) 京都市市営住宅条例第 21 条および京都府府営住宅条例第 32 条
- 注 25) 都市再生整備が管理業務委託している住宅管理センターを含む。
- 注 26) 京都の都心部には「両側町」のように街路上に境界が表れない「町」が多く、街路に囲まれる団地の立地と対照的である。しかし大規模な改良住宅である下京区の S 団地のように、宅地と複雑に隣接しているため境界がわかりにくい事例も散見された。
- 注 27) 祠の位置の種別を「狭間 between」「広場状空地 square」「駐車場 parking」「ピロティ piloti」「団地境界上 fringe」の 5 つとし、祠の向きの種別を「住棟 apartment」「通路 path」「広場状空地 square」「駐車場 parking」「団地外 outward」の 5 つとした。複数の祠がそれぞれ異なる種別の場合、これらの組合せ（apartment+path 等）によって示した。
- 注 28) 市営 M 住宅（山科区）の自治会長（当時）へのヒアリング（2015 年 6 月 7 日実施）による
- 注 29) 本稿は、筆者による大会学術講演会での発表の内容を元に、大幅に加筆・修正を加えたものである。参考文献 21) 22)。

参考文献

- 1) Tanaka, H.: Jizō shinkō to minzoku (Jizō belief and folklore), Mokujisha, 1989 (in Japanese)
田中久夫: 地藏信仰と民俗, 木耳社, 1989
- 2) Murakami, N.: Kyōto Jizō-bon no rekishi (History of Jizō-bon in Kyōto), Hōzōkan, 2017 (in Japanese)
村上紀夫: 京都地藏盆の歴史, 法蔵館, 2017
- 3) Architectural Institute of Japan: Shōgō jūtaku keikaku kenkyūshi (History of Multiple dwelling housing study), Architectural Institute of Japan, 1989 (in Japanese)
日本建築学会: 集合住宅研究計画史, 日本建築学会, 1989
- 4) Noguchi, R. and Taniguchi, H.: The Concept of the Threshold and Nucleus as a Clue to Neighborhood Planning: A study on neighborhood planning, Part 2, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No.368, pp.91-101, 1985.10 (in Japanese)
野口瑠美子, 谷口汎邦: 領域形成よりみた近隣空間計画過程における閾・核概念について-集合住宅における近隣空間構成に関する研究 2, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 368 号, pp.91-101, 1985.10
- 5) Yagome, Y. and Kanno, H.: Construction Trend and Structural Changes in the Exterior of the Apartment Houses Built by JHC: A study on the structural changes in the exterior of apartment houses built by the Japan Housing Corporation (JHC) and the user's behavior Part 1, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.76, No.661, pp.521-530, 2011.3 (in Japanese)
矢込祐太, 菅野博真: 公団賃貸集合住宅団地の空間構成の変遷と外部空間の構造についての考察-東京都における集合住宅団地の年代的・空間的な構成変化と外部空間の利用に関する研究その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 76 巻, 第 661 号, pp.521-530, 2011.3
- 6) Takeuchi, Y. and Funo, S.: Considerations on the Distribution of Zizou in Kyoto, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), Vol.64, No.520, pp.263-270, 1999.6 (in Japanese)
竹内泰, 布野修司: 京都における地藏の配置に関する考察, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 64 巻, 第 520 号, pp.263-270, 1999.6
- 7) Maeda, M., Takada, M., Morishige S. and Nishino, K.: Actual Condition of Jizo-bon Management and Diversity of the Participants in the Central area of Kyoto: A study on roles of Jizo-bon in the resilient formation of the local community, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.80, No.714, pp.1833-1842, 2015.8 (in Japanese)
前田昌弘, 高田光雄, 他: 京都市都心部における地藏盆の運営実態と参加者の多様性-レジリエントなコミュニティ形成に果たす地藏盆の役割に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 80 巻, 第 714 号, pp.1833-1842, 2015.8
- 8) Kyōto no jizō shinkō to jizō-bon wo ikashita chiki kasseika jigyō jikkō inkaī: Heisei 25 nendo Kyōto no jizō shinkō to jizō-bon wo ikashita chiki kasseika jigyō hōkokusho (Annual business report of Religious development featuring Jizō belief and Jizō-bon in Kyoto), 2014 (in Japanese)
京都の「地藏」信仰と地藏盆を活かした地域活性化事業実行委員会: 平成 25 年度 京都の「地藏」信仰と地藏盆を活かした地域活性化事業報告書, 2014
- 9) Noguchi, M.: A Study on Neighborhood Space (6): A Case Study of Zizobon in Kyoto, AIJ Kinki Chapter research meeting (planning section), No.24, pp.553-556, 1984 (in Japanese)
野口美智子: 近隣空間の研究 (6) -京都<山階南>学区における地藏盆の開催単位及び演出空間の実態, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系 (24), pp.553-556, 1984
- 10) Nagao, T., Oba, O. and Kasahara, K.: The change of the installation patterns of the Zizou in modern times of Kyoto, AIJ Kinki Chapter research meeting (planning section), No.42, pp.485-488, 2002 (in Japanese)
長尾智子, 大場修, 笠原一人: 近代京都における地藏安置の変遷, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系, 42, pp.485-488, 2002
- 11) Unoda, A.: Manshon ni okeru jizō-bon gyōji no seisei : Kyōto-shi shimogyō-ku nishiōji haimu wo jirei to shite (Generation of jizō-bon events inside Apartment buildings : a case of Nishiōji heim in Shimogyō-ward Kyoto city), Bulletin of the Folklore Society of Kinki, No.164-165, 2001 (in Japanese)
宇野田綾子: マンションにおける地藏盆行事の生成-京都市下京区西大路ハイムを事例として, 近畿民俗, 164・165, pp.41-66, 2001
- 12) Matsuzaki, K.: Meguri no fōkuroa (Folklore of pilgrim), Meicho shuppan, 1985 (in Japanese)
松崎憲三: 巡りのフォークローア-遊行仏の研究-, 名著出版, 1985
- 13) Hayashi, E.: Jizōbon : Juyō to tenkai no yōshiki (Jizōbon : Tradition of recipience and evolvement), Hatsushiba Bunko, 1997(in Japanese)
林英一: 地藏盆 -受容と展開の様式, 初芝文庫, 1997
- 14) Matsūra, C.: Jizōbon no techō (Handbook for Jizōbon), Mibudera, 1986 (in Japanese)
松浦俊海: 地藏盆の手帖, 壬生寺, 1986
- 15) Kyoto city: Kyōto-shi shiei-juūtaku sutokku sōgō katsuyō keikaku (General plan of Kyoto city municipal housing stock production), 2011(in Japanese)
京都市: 京都市市営住宅ストック総合活用計画, 2011
- 16) Urban Renaissance Agency: UR chintai jūtaku sutokku kobetsu danchi ruikai (an) ichiran (Catalog by apartment types of UR rental housing stocks), 2011 (in Japanese)
独立行政法人都市再生機構: UR 賃貸住宅ストック個別団地類型(案)一覧, 2011
- 17) Kyōto-shi shishi hensansho: Kyōto-shi jūtaku gyōsei-shi (History of housing administration in Kyoto city),Vol.3, Kyoto city, 1968 (in Japanese)
京都市史編さん所: 京都市住宅行政史(京都市市政史料 3), 京都市, 1968
- 18) Kyōto-shi shishi hensansho: Kyōto no rekishi (History of Kyoto), Vol.9, Kyoto city, 1968 (in Japanese)
京都市史編さん所: 京都の歴史(第 9 巻 世界の京都), 京都市, 1980
- 19) Kyōto-shi toshi jūkankyōkyoku: Kyōto-shi kōei jūtaku no ayumi (advances in public housings in Kyoto city) revised edition, 1996(in Japanese)
京都市都市環境局: 京都市公営住宅のあゆみ 平成 7 年度改訂版, 1996
- 20) Kinoshita, Y. and Ueda, M.: Ie danchi machi (Home, danchi and town), Sumai no toshokan syuppan-kyoku, 2014 (in Japanese)
木下庸子, 植田実: いえ 団地 まち-公団住宅設計計画史-, 住まいの図書館出版局, 2014
- 21) Masaki, T.: A study on geographical distribution and spatial arrangement of Jizo in public housings -Through surveys of Jizo placed inside public rental apartments in Kyoto City, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, Architectural Planning and Design, pp.1131-1132, 2016 (in Japanese)
政木哲也: 「団地内地蔵」の地理的分布と配置に関する考察 -京都市の公的賃貸住宅団地にある地藏祠の調査を通して, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp.1131-1132, 2016
- 22) Masaki, T.: A study on geographical distribution and spatial arrangement of Jizo in public housings, Part 2 -Through transitions and developments of public rental apartments in Kyoto City, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, Architectural Planning and Design, pp.1087-1088, 2017 (in Japanese)
政木哲也: 「団地内地蔵」の地理的分布と配置に関する考察 その 2 -京都市の公的賃貸住宅団地の開発と変遷をふまえて, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp.1087-1088, 2017

CONFIGURATION, DISTRIBUTION AND TRANSFORMATION OF *DANCHI-NAI-JIZO* IN KYOTO CITY

A study on manners and common space of public housing Part1

Tetsuya MASAKI^{*1} and *Dai NAGASAKA*^{*2}

^{*1} Assist. Prof., Dept. of Urban Environmental Design, Kyoto Tachibana University, M.Eng.

^{*2} Prof., Faculty of Design and Architecture, Kyoto Institute of Technology, Dr.Eng.

In this study, we have surveyed the spatial configuration and distribution of *Jizo* (stone statue of Buddhist god) found within the limits of public housing in Kyoto city, and analyzed them in order to consider the transformation of common space by manners brought in by the residents. *Jizo* in urban areas is common mainly in the Kansai district. In the case of central Kyoto, citizens have traditionally formed religious urban spaces for the local community by enshrining *Jizo* on the streets.

Kyoto suffered a serious housing shortage caused by the rapid population flow during the post WW2 era and the high economic growth period. Major suburban housing developments were accelerated to solve this issue. This led to many residents living in a whole new modern urban space. On the occasion of developing their own community, they have brought in their religious customs, including *Jizo*.

Danchi-nai-Jizo (*Jizo* inside public housing) is still largely unexplored; a field research was conducted in order to clarify the present condition of every *Danchi-nai-Jizo*. This research includes recording their locations and orientations among the site. The total number of surveyed *Danchi* is 148 including three different housing categories; municipal housing, prefectural housing and rental apartments built by Japan Housing Corporation (JHC). As a result, 55 of these *Danchi* included *Danchi-nai-Jizo*.

Our analysis of geographical distribution shows that *Danchi-nai-Jizo* can be found in every ward of Kyoto except Kamigyo-ward and more in suburban *Danchi* than ones in the central area. Some specific areas were found where many *Danchi-nai-Jizo* gather densely. Our analysis of chronological distribution of *Danchi-nai-Jizo* linked with construction year of each development, clarified that *Danchi-nai-Jizo* exists widely from the old *Danchi* to the new. They were both found in larger *Danchi*, most built in the 60's and early 70's, and smaller ones built after the 80's.

Focusing on *Danchi-nai-Jizo* within common spaces, three pattern types, "Apartment type", "Danchi type" and "Neighborhood type", were derived through analysis of space configuration. This corresponds to three different scales of community space. The "Apartment type" is the configuration of *Danchi-nai-Jizo* that is placed close to the residents nearby the apartment building, at the center of a small unit of community space. *Danchi-nai-Jizo* for "Danchi type" is usually located inside or around the square facing towards the empty space. In this case, the *Danchi-nai-Jizo* is at the center of community space for the entire *Danchi*. "Neighborhood type" describes the *Danchi-nai-Jizo* on the border of the housing development. This configuration looks similar to *Jizo* seen on the streets in central Kyoto, but this *Danchi-nai-Jizo* has less relation to the *Danchi* it self.

Danchi-nai-Jizo is an informal act by the residents, but it has been accommodated in the *Danchi* space for decades. The "Apartment type" *Danchi-nai-Jizo* has fit in a small excess space around the resident access path and more accommodation is found in these common spaces. In the case of "Danchi type", it is about how *Danchi-nai-Jizo* was accepted and how it replaced the original function of the open space. "Neighborhood type" showed how *Danchi* space accommodates to the surrounding neighborhood.

In conclusion, it is safe to say that *Danchi-nai-Jizo* has existed despite the transformation of *Danchi* space, and flexible and accommodating nature in *Danchi* was clarified through the existence of *Danchi-nai-Jizo* seen in various types of common spaces.

(2017年8月3日原稿受理, 2018年3月26日採用決定)